九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

英京雑記

前川, 俊一

https://doi.org/10.15017/2332887

出版情報：文學研究. 52, pp.31-45, 1955-06-20. 九州文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

英京雑記

前川俊一

ロンドンの第一日

一九五三年十二月十六日。午前二時半にステュワドに起される。グレイヴゼンドでのパイロットの交替はとつくにすぎて、いまイースト・インディア・ドックの岸壁に横付けになろうとするところ。「じきに便所をとします」とのことに、用を足し、ついでに手廻しよく顔をあたつたが、眠いのでまたベッドにもぐり込む。

次に目が覚めたのが七時半頃。船窓から眺める空はこの時刻にしてはひどく暗い。ロンドンは北緯五十一度余、樺太の元の境界線よりも北だつたな、と思い出す。いつもより早く、八時に船中最後の食事をとる。同船の乗客は殆んどマルセーユで降りてしまい、相手は英国人のギブスン氏ただ一人である。やがて移民官、検疫官等が乗船して来る。制服をつけた若い背の高い税関吏が船室にはいつて来たが、部屋の一隅に整理されて並べてあるスート・ケイス等荷物数個をじろり一瞥しただけで手は触れない。「酒類はもつてるか。」「ノウ。」「カメラは。」「二つある。」一寸むづかしい顔になつたが「帰国のとき二つとも持つてかえるのですぞ。」と念を押されただけであつさり放免。

時刻はうつるが相変らず空はどんよりと煤ぼけて薄暗く、いつ夜が明けたのやらはつきりしない。「ロンドンでは、これ位ならまだいい方です。」とは船員の言葉であつた。つい五日前、アフリカ西岸のカサブランカ港に上陸したとき、白堊の新市街に降りそそいでいた強烈な日ざしと碧い碧い空が頭をかすめる。

十時すぎ、船長はじめ世話になつた船員の連中に挨拶をすませ、英国文化振興会からわざわざ迎えによこしてくれた自動車に乗つて都心に向う。ふと前を見ると、運転手席が右になつている。香港やシンガポール同様、ここも左側通行だつた。はじめは人通りの少い淋しい通りだつたが、やがて数多の自動車が徐行している、人通りの多い通りに出る。建物は石造も煉瓦造りも古びて変にくすみ、陰鬱な外観ながら、頑丈な造りでどつしりした、重々しい感じが伝わつてくる。シティーに入つたと見えて写真でおなじみのロンドン塔、セント・ポール寺が左手に見えてくる。一頭立て

の幌馬車が一台、あたりの自動車を尻目にカッカッと威勢のよいひづめの音を立ててすれちがつたのには驚いた。「東京では馬車を見かけることはないが、」と運転手台の迎えの御仁に話しかけると「近頃ロンドンでも非常に少くなつた。」との返事だつた。

十一時すぎにラッセル・スクェアに程近いロイヤル・ホテルにつき、そこで振興会の御仁に別れる。ホテルは真新らしい、六階立ての宏壮な建物だ。マルセーユで使い残りの僅かのフランの外現金が殆んどないので、惜しいながら十弗のトラヴェラーズ・チェックを受付に出して磅に替えて貰い、ついでに一泊代払う。朝食付きで十七志六片。部屋は表に面した五階の小さな一室だつた。一旦荷物を部屋に置くとすぐ引返して玄関へ降り、そこで金ピカの制服を着た老人のポーターをつかまえて東京銀行への道筋をきく。バーチン・レインときいて件の老人、私をホールの一隅のロンドン大地図を張りつけてある壁のところにつれて行き、まず図上に赤い印のついたこのホテルの位置を示し、それから行先への道筋をゆつくり、丁寧に教えてくれるが、地理感覚のゼロな私には仲々呑込めぬ。兎も角ホテルから南に向つて真直ぐに歩いて大通りに出て、そこからバスを拾えばよいという見当をつけ、ポーターに半クラウンを握らせてホテルを飛出す。無事オクスフォード・ストリートに出たが、カフェテリアの前まで来ると、おなかが北山なのに気付き、そこにはいる。もう正午だが、昼食には少し早すぎるせいか、大して込んでいない。行列に加わつて見よう見まねで、蒸しソーセーヂにヂャガイモを短冊形に切つてあげたのを満載した料理一皿をとる。一志六片。あげヂャガイモの味はわるくないが、ソーセーヂは何の肉か、ぶよぶよして味も悪く感心しない。しかし、あたりを見まわすと、これに芥子を塗りつけてうまそうにバクついている紳士淑女が多い。外にティーが三ペンス。味は値段相当、食事をすませて街頭に出たとたん、ヘルメットをかぶつた見上げるように大きいおまわりさんにぶつかりそうになる。これ幸いとつかまえて道をきくと、十七番のバスに乗ればよいと教えてくれた。十七の番号をかかげた歩道のバス・ストップで待合わせて、赤塗り二階立ての、安定の悪そうなバスに乗込む。車掌が叫ぶ地名が仲々ききとれぬ。それで最後部の車掌に一番近いところに席を取り「バンクに来たら知らせてくれ」と頼んで置く。車掌の注意で無事目的地に下車、有名なロンバード・ストリートに出る。両側の建物は立派だが、道幅は案外せまい。歩道の上に、金色のバッタ、ヴィオラをかなでる婦人など変つた意匠の看板がつき出ているのは、どれも銀行の看板らしい。そこに一五六三などと数字がきざんであるのは創立の年代であろう。山高帽をかぶつた紳士がすました顔をして何人もすれちがう。ヴィオラの婦人の看板の下を左にまがつた小路がバーチン・レインだつた。東銀で、日本から送つた金のうち、まず五十磅を現金で受取り、あとはここの日本人行員O氏のすすめで、小切手帳を作つて貰うことにする。ロンドンの大商店なら小切手で受取つてくれる由。現金を持あるくよりは安全ではある。受取つた金のうち、五磅紙幣はすかしはあるが白紙に黒一色で印刷をしたお粗末な紙切れで、何だか正式のおさつのような気がしない。全部一磅紙幣に換えて貰おうかとも思つたが、嵩ばるのであきらめる。ここで一緒になつた、ロンドン在住卅年という、大きな頭をした六十前後の品のいい日本人の老紳士とつれ立つて銀行を出て、ハノヴァ

・ストリート方面行きのバスを教えて貰う。「君、はじめからコンをつめて勉強しないがいいよ。ロンドンは不健康地だからね。」と別れしなに注意される。オクスフォード・サーカス下車、リーゼエント・ストリートを右にまがつて文化振興会学生福祉課をたずねあて、打合わせをすます。私が会つたのはミス・クレヴェルドという若い婦人と外二名だつたが、ここには婦人が圧倒的に多く、それにどの部屋も仲々忙しそうなのが注意をひいた。ここでロンドン市内のバスと地下鉄の要領のいい小さな案内図をもらう。これで市内の見当もつき、交通機関の利用も案外造作なさそうだとわかつた。再びバスで、貰つたばかりの地図をたよりにハイド・パーク・コーナー下車、ベルグレイヴ・スクェアの日本大使館を訪れて挨拶をすませる。私宛に日本から手紙が来ていないか受付子にきいたが、一通も来ていないとのことに不審をいだく。ここで建設技官のI氏に紹介される。五時すぎ大使館を出て、I氏の案内でピカデリ・サーカスに出る。さすがに賑やかな通りだ。夕空に赤、青、緑のネオンの広告が照り映えて美しい。附近のフォートという簡易食堂(スナックバー)で簡単な夕食をしたためながら、ロンドン生活についての話をきく。私と大体同じ条件で留学中のこととて、参考になるところが多い。チェリング・クロス通りで別れ、近いのでホテルまで歩いて帰る。途中フォイルズ書店の店先を通る。まだ店が開いていたので一寸はいつて見る。N・E・Dの普及版が新本で五十磅で出ていた。ここの地下室の地理及び旅行部でロンドン大地図の布裏打ちしたのを買いもとめ、ついでに故国への通信用に色絵葉書を数枚買う。ヂェノアやマルセーユで買つた品にくらべると色がすつきりせず、図柄もまずく、野暮くさい感じがする。ブリティッシュ・ミュージアムのまえを通る。昼間はどうか知らぬが、夜は寂しい通りだ。ホテルにたどりついたのは八時前後。バス・ルームに入り、一人で栓をひねつて冷水と熱湯を適度の温度に交ぜ合わせて入浴。久し振りの淡水浴で心地よし。室に戻れば一時に疲れが出て手紙を書く気もせず、そのまま寝床にもぐりこむ。枕元のラジオのスウイッチをひねつて、頭上のサウンド・ボックスからきこえて来る、ホウム・サーヴィスの歯切れのいい英語のニューズ放送をきいているうちに、いつしかうとうとと寝入つてしまう。

大英博物館

十二月廿四日。六時半すぎ目が覚める。床の中で六時五十五分からの天気予報とニューズをきき、七時半起床。部屋の中の洗面所で顔をあたり、支度をして八時すぎ一階のホールに降りて行く。ホールの食堂の入口に近い大テーブルの上に日刊新聞が十種あまり並べて置いてある。読みごたえのあるのはタイムズとマンチェスター・ガーディアン、それにデイリー・テレグラフ。ホールに下りて行く時間があまり遅いと売切れて、自分の望む新聞が手に入らぬことがある。今日はマンチェスター・ガーディアンを読むことにきめ、大枚三ペンスを投じ、それを持つて食堂にはいる。何しろ十数頁の内容なので一通り目を通すだけでも暇がかかる。見ていると、食堂で新聞を読みながら朝飯をたべる人が多いのでそれにならうことにした。読みのこしはポケットにつつ込んで置いて、地下鉄やバスの中でひつぱり出して読むらしい。今朝はコーンフレークスとハム・エグスを注文する。トーストはトースト

立てに四切れか五切れ位入れて持つて来てくれる。卓上にはバタ、ヂャム、それにマーマレイドの皿が置いてある。コーヒーは銀色の金属ポットに三杯位はおかわり出来る分量を入れて持つて来る。コーヒーの代りに紅茶を注文してもよろしい。コーヒーがまずいので私はいつも紅茶だ。

食堂でたつぷり四十分をすごし、九時半にホテルを出て、ブリティッシュ・ミュージアムに向う。ここから四町程の距離だ。途中、ロンドン大学の構内にまよい込み、東洋アフリカ研究所の宏壮な建物の前に出る。そのうちここも訪ねたいが、クリスマス休暇中のこととて今は遠慮する。ミュージアムは北口からはいつたので、エドワード七世ギャラリーの一階の部から見はじめる。東西両洋にわたる古代のおびただしい美術工芸品があつめられている。ゆつくり見て廻ればこのギャラリーだけでも半日はかかりそうだ。メキシコのアズテク時代の作という、見事な水晶の髑髏の彫刻が目をひく。一番感服したのは、この部屋の中央から東寄りに独立のガラスのケースに収められた、中国唐代の作と思える高さ一米程の彩色塑像だつた。当時の高位の女官らしい服装をした恰幅のいい婦人が、顔にかすかな微笑を浮べ、両手をこまねいて悠然と立つている。大らかな気品に充ち、唐朝の宮廷のにおやかな雰囲気をまざまざと感じさせるような逸品だ。もろい材料で出来ていながら、保存が非常によい。近頃入手したものらしく案内書には載つてない。二階のプリントの部では、丁度歌麿の版画の展観を催していた。構図に珍しいものが多い。あわび取りの海女の三枚続きが出ていたが、これは保存があまりよくない。

中国や日本の仏像も幾体か出ているが、いずれも二流品で、この方面で極東文化の到達した高さをうかがわせるには足りない。ただ、法隆寺百済観音の原寸大の摸刻がひとり気を吐いていた。さすがに印度の仏像彫刻の部にはすぐれたものが多い。

エヂプトの部にまわる、石棺や神像、スフィンクス像など大きなものは一階に、北から南にかけて年代順に並べられている。ミイラや小さい墓葬品は二階にある。相当な品数だが、先きにカイロ博物館の驚くべき豊富な蒐集を見ているのでさして驚かぬ。只ここにはナポレオンの遠征軍が発見し、エヂプト学の進歩に劃期的な役割を果した例のロゼッタ・ストウンがある。

アッシリアの部では、獅子狩などの豪快な浮彫を一杯に施した広い石壁で、四壁をぎつしり張りつめた部屋がある。発掘したアッシリアの宮殿の内部をロンドンの一角に再現したようなもので、そのやり方の大規模なのに驚く。学生の時分に読んだダンテ・ゲイブリエル・ロセッテイの「ニニヴィの歌」は彼がこの部屋を訪れたときの感慨をうたつたものであつた。

エルギン・マーブルでは、パルテノンの北のフリーズに浮彫した、躍動する騎馬群の四肢が重なり合つて生み出す複雑なリズムが素晴らしい。同じ神殿の東の破風の左隅には、東天に躍り出ようとする日輪神の軽車が彫られている。実はその御する馬の首と胸の一部が見えているだけだが、その下にひろがる暁の海面が目に浮ぶ。

ここまで見て来るうちに、相当に疲れたので、印刷本、写本や有名人の肉筆原稿、書簡の部はまたの機会にゆづることにする。かえりがけにアジア室の片隅でチベットの秘仏群を見つける。その一つは日本で見る象頭の和気あいあいたるものとはことかわつ

て、男神は牛頭で幾対かの手足をそなえ、口をカッと開いた形相すさまじいものであつた。あとでバリーに行つたとき、ロダン博物館でこれと同じ姿態の作品を見た。その方は完全にロダン化された、官能の香り高いものであつたが、これとて只の人間でないしるしに、角のような短い尻尾がついていた。東洋の歓喜天、西欧に渡つてサテュロスと化す？

セント・ポール寺院

一九五四年十二月七日。かねての打合わせ通り、午後三時にセント・ポールズ地下鉄駅で広島大の小川教授と落合い、セント・ポール寺院に向う。もと祈禱書や珠数を売る店が並んでいたというバタノスタ・ロウという狭い通りをよぎつて、セント・ポールズ・チャーチヤードに出ると、すぐ目の前に例の大円屋根が冬空に立ちはだかるように聳えている。この辺はロンドン市中でも最も空襲の被害の甚だしかつた地区の一つだ。一九四〇年十二月廿九日の大空襲で、この寺院正面のラドゲイト・ヒル通りに沿つた地区を除き、その周辺は殆んど全部焼失しているのに、恰好の目標と思われるこの寺院だけが殆んど無疵で残つているのは奇蹟に近い。もつともこの寺院も直撃弾二個を受け、そのうちの一個は内陣の屋根をつき抜けて聖壇を破壊し、ために内陣は現在修理中である。しかしこの空襲のおかげで、間近に立てこんでいた民家が一掃され、寺院の遠望がきくようになり、その威容を充分に観賞出来るようになつたのは大禍のもたらした小福である。正面にまわると、この寺院の竣工したときの女皇アンの記念像が立つている。荘厳な内部にはウェリントン公、ネルスン提督をはじめとして、ゴードン将軍、キッチナー元帥等、政治家や軍人の記念像が数多い。美術家ではターナーのタブレットがある。一通り本堂を見て廻つたあと、これまで何度か来て見のがしたヂョン・ダン博士の像を見ようとしたが、広い堂内のことととてどの辺にあるのか見当がつかぬ。通りがかりの人からそれはディーンズ・アイルにあると教えられたが、そこがまたわからぬ。まごまごしているうち、折よく内陣の近くで五十前後の年輩の坊さんに出あう。たずねると気軽に案内してくれたのが、内陣の南側を通つている側廊である。成程ここには、この寺院のディーンをしていた坊さんの寝像が何体かある。ダンの大理石像はこの側廊の中程の南側の壁の凹みに安置されてあつた。屍衣をまとい、眼をとじて、骨壺の上にちよこなんと立つている。腰の辺が心持ち太くなつて、身体全体が安定のいい紡錘形をなしている。屍衣のひだの線もよく出来ていて、丁度両のズボンのポケットに深くつつこんだような恰好の両腕も、両膝をくつつけ合せて、一寸内股のような恰好をした両脚も、ころもをすかしてはつきり読みとれる。文壇の奇才を記念するにふさわしい、奇抜な、垢ぬけのした作品である。この像の作られた事情が事情だけに、すまして目を閉じている顔がいまににやりと笑い出して「どうです」と話しかけそうな錯覚にとらわれる。像の上には、ダン自身の指図になるというラテン語の碑文が刻んであつた。これは一六六六年のロンドン大火をまぬかれた、堂内唯一の記念像だという。

ダンと親交のあつたアイザク・ウォルトンによれば、生前に自分の像を作らせようという考えを彼にふき込んだのは、彼の侍医フォックスだつたという。ウォルトンの「ダン伝」に曰く——

「記念像を建てることにきまると、彼（ダン）は彫刻師を呼んで、まわりと高さを指定して木で骨壺の形をつくらせ、それと一緒に丁度彼の背丈の長さの板を持つて来させた。『これらを手に入れると、早速より抜きの画家に彼の肖像をかく用意をさせ、次のようにしてその画を得た。――まず彼の広い書齋に炭火をいくつも起させ、そこへ彼が屍衣布を手にしてあらわれ、衣類を全部脱ぎすてると、この布を自分にまとわせた。そして頭と足のところで結び目をつくつてしばらせ、手をしかるべき恰好に置かせた。屍体が通例ととのえられ、屍衣につつまれて、棺または墓場に入れられるときのように。こうして彼は目を閉じて骨壺の上に立つたが、彼の痩せて青白い死人のような顔が見える程度に屍衣はのけられていた。その顔は特に東に向けられていたが、彼はその東から自分と我等の救い主キリストの再来を待ちのぞんでいたのである。』こういう姿勢で丁度等身大の絵をかかせた。絵が完成すると自分の枕辺に立てさせたが、それは彼の臨終までそのままになつて、不断に彼の熟視するところとなつた。彼が逝去すると、それは彼の最も親しい友であり、遺言執行者であり、当時セント・ポールズの主任駐在僧であつた、ヘンリ・キングに贈られた。キングは一塊の白大理石に彼をそのように刻ませた。それが件の寺院に立つている像である。」

屍衣をまとつたダンの半身像は一六三二年出版の彼の説教集「死の決闘」の口絵にものつている。それもこれも同じ原画にもとずいて作られたものであろうが、両者から受ける感じには相当のへだたりがあるようである。それにしても、等身大の全身像の原画はどうなつたのであろうか。

このとき、つい先年までここのディーンをしていた「直言集」や「英国論」の著者イングのことを思い出し、イング僧正の記念碑はここにないのかときいた。すると例の坊さん「なにインヂはまだ生きてる」という。いや彼は私がロンドンに来てから間もなく死んで、新聞にその略伝が出たのを覚えている、と答えたが、坊さん、黄面の異国人のいうことなど信じられぬといつた顔付きである。彼がインヂと発音したのも、ここのれつきとした坊さんのこととて一寸まごついた。昔、厨川白村がこの僧正の名前のよみ方のことで誰かとわたり合つたことなど思い出しながら。

しばらくこの像のまえで時をすごして後、坊さんに礼をいつて別れ、寺院の出口近くまで来ると、あとから先きの坊さんがわれわれを追つかけてきた。何かと思つてふり向くと「君の方が正しかつた。彼は今年の二月になくなつていた。」と断り、ダンの彫刻の写真を売つている店のありかを教えてすたすた引返して行つた。

ロンドンの古本屋

ロンドンで古本屋の集つている街といえば、まずチャリング・クロス・ロウドとグレイト・ラッセル・ストリートの二つであろう。前者はオクスフォード・ストリートとニュー・オクスフォード・ストリートの丁度境目を、南に向けトラファルガー・スクエアに向つて走つている通りで、地下鉄のトトナム・コート・ロウド駅とレスター・スクェア駅との間の街路の両側に、有名なフォイルズをはじめとしてマークス、ヂョウゼフなど十四五軒の店が

ある。後者は大英博物館の前の通りであつて、七軒程の店が出ているが、ここにはルザクやベトナムのように東洋関係のもの、サルビーのように考古学、人類学関係のものを扱う店とか、ヂョーヂ・ハーディングズのように歴史、経済関係のものを扱う店といつた風に、やや専門化した書店が多い。それからチャリング・クロス・ロウド沿いのウィンダム劇場の少し南を東に入つたセシル・コートの両側には殆んど軒並に相当な古書店が十二軒程並んでいる。外に有名な古書店としては、オクスフォード・ストリートの南側で、ボンド・ストリート地下鉄駅とマーブル・アーチ地下鉄駅の中間位のところにバムバス書店がある。ここは新刊書も手広く扱つているが、古書部は文学書が多い。またニュー・ボンド・ストリートにはマイヤー、このストリートから西にはいつたグラフトン・ストリートにはクォリッチ書店がある。この二軒は主に好事家向きの高価本を扱う店である。ピカディリ・ストリートのハッチャードも同種の店である。またオクスフォード・ストリートのセルフリッヂ百貨店の少し西を南に入つたオードリー・ストリートにあるバッツフォードはチャリング・クロス・ロウドのツェマーと並んで美術書を扱う大きな店である。またオクスフォード・ストリートの北の通りで、有名なウォレス・コレクションに近いウィグモア・ストリートにはドースン書店と、タイムズ・ブック・ショップがある。後者は古書部は大したことはないが、新刊書は各方面に亘る優秀書を揃えている。文学方面の新刊書を精選して置いてあるチャリング・クロス・ロウドのベター・ブックス・ショップと並んで学徒には有益な書店である。尚、これは古本ではないがベター・ブックス・ショップに出る特価本には良書が多く、時にフォイルズあたりで売つている値段の半額以下で新本が手に入るときがある。リーヂェント・パークの南のマラバン・ハイ・ストリート（マラバン・ロウドではない）の八三番地にはエドワードという大きな古書店がある。豪華な革製本や美術書などの外、普通の文学書も数多い。外にロンドン大学に近いストア・ストリートに一軒、ラッセル・スクェア地下鉄駅に近いマーチモント・ストリートに二軒、一寸した古書店がある。後の二軒のうちの一軒、エリック・ブランデルには、どこから仕入れてくるのか、トムスンの「シーズンズ」の初版本とか、アディスン全集の古版とかいつた種類の文学書が、格安の値段で出ていることがある。また英国の四法学院の一つリンカンズ・インの前の通りのチャンスリ・レインにも土地柄法律専門の書店を交えて四軒程古本屋があり、リンカンズ・インの構内にも主に法律方面の古書を扱う店がある。特種な書店としては、大英博物館の前を南に走るミュージアム・ストリートとニュー・オクスフォード・ストリートの交叉点の南側に店を開いているスペンサーがある。ここは古い彩色銅版画の類と、それに英文学の初版本ばかりを扱う店で、本屋というよりは一種の骨董店である。勿論こんなところで買う初版本は相当に高価である。また扱う本も精々二十世紀のはじめ頃までで、T・Sエリオットの詩集やロレンスの小説の初版本などは置いてない。その外、マグ書店をはじめとしてアールズ・コート・ロウドのケネス・ウッド、サウサムプトン・ロウのウォルフォド・ブラザーズ、サウス・ケンジントンのサーロウ・ストリートのバルトニーなどロンドン市中にちらばる古書店を一々数え上げればきりがない。

ロンドンの代表的な古本屋といえば、まずフォイルズがあげられる。オクスフォードのブラクウェルと並んで英国の古書店界の両横綱といつたところである。どちらも各方面の新書、古書の双方を扱う点よく似ている。もつともフォイルズの方は「世界最大の書店」と呼称している。いわば本の百貨店ともいうべき店で、蔵書がありとあらゆる部門に亘り、また数の尨大な点では少くとも英国一であろう。マネット・ストリートという小路をはさんで、チャリング・クロス・ロードに面した二つの建物の各階に部門別になつてギッシリ本がつまつている。どの階も自由に顧客が立入り、手にとつて検分するにまかせている。しかし、文学の部に限つていえば、店の大きな割合に、そして書物の数の多い割合に、これはと思う本が少い。尚ここに並べられている本のすべては、一度は係りの専門家が眼を通していて、珍らしい高価な本は抜かれて、北の建物の一階の一部にある稀書部（レア・ブックス・デパートメント）に収まつている。しかし私は、この店の街頭に向けて並べられた一志均一の棚の中から、リットン・ストレイチの「クィーン・ヴィクトーリア」の初版本をさがし出したことがある。

パリーのセーヌ河の両岸にはノートル・ダームからルーヴル博物館あたりにかけて、数百軒の古版画店、古書店が露店を出して、行人のすずろ歩きの興を添えている。また、今はどうか知らぬが、私が本郷に住まつていた学生時代には、夜になると帝大前の大通りの歩道に古本屋が何軒もささやかな露店をくりひろげ、それをひやかして歩くのが夏の夜の楽しみであつた。ところがロンドンには露店の古本屋がない。只一つの例外は、ホウボン高架橋の下を通るファリンドン・ロウド沿いの、クラークンウェル・ロードとの交叉点に近い東側の歩道に開かれる露店である。これはヂェフリーという本屋只一軒が、近くのセクフォド・ストリートから毎日お天気のいい日にここに出張して来て歩道際にずらりと棚を設け、本を並べるのである。大抵午前十一時半頃に店を開き、午後四時頃には仕舞う。どこから仕入れて来るのか、古びた、保存の悪い本が多く、折角いい本を見つけても、端本で一巻欠けていたり、表紙がとれていたりする。しかし場末の淋しい通りにもかかわらず、いつ行つても相当の客で賑わつているのは、外の店にくらべて断然安く、それに時々素敵な掘出物があるせいであろう。玄人らしい人が十数冊まとめて買つて行く姿も見受けられる。エドマンド・ブランデン先生もこの露店の御得意であつたとか。ここにはギリシヤ、ラテン語の古書もよく出るが、古典語に暗い私には猫に小判である。一度ここで十八世紀中葉の詩人ロバート・ブレアの長詩「墓（グレイヴ）」のために描いたウィリアム・ブレイクの挿絵（一八一三年版）が十三枚揃つたのを十五志で買つたことがある。これは元はそう珍らしいものでもなく、それに彫版はシャボネッティがしている関係もあつて、値段も安かつたらしいが、今ではロンドンでも滅多に見あたらなくなつた。

ロンドンでは、古本はチェリング・クロス・ロウドあたりと場末の古本屋とでは値段の開きが割合に大きい。しかしチェリング・クロス・ロウドの大きな書店に並んでいる本でも戦後の神田あたりの古本屋に並んでいる本とくらべるとぐんと安い。それでロンドンに来たての、少しでも本に興味をもつた学生は、私のような貧乏留学生でもつい財布の紐をゆるめて、あとで困るということになる。

しかし、これ程あちこちに古本屋はありながら、買いたいと思う本は仲々見付からない。私は日本を出るときから、ワーズワースのコンコーダンスと彼の甥のクリストファ・ワーズワースの書いた彼の伝記を買う予定で来たが二冊共到頭手に入らなかつた。T・S・エリオット以後の新傾向の詩人の詩集のたぐいも時たまにしか見当らない。こういう本を特にあつかつている店といえばリーヂェント・ストリートを西に入つた、ヴァイゴウ・ストリートのバートラム・ロウタ書店（ボドレ・ハウス）かサウス・ケンジントンのハリントン・ロウドのビーチャム書店位のものであろうが、そこでも自分の欲しい本が見付かることは少く、また見付かつても相当に高い。結局足にまかせて根気よくさがし廻る外ないということになる。フォイルズあたりにたのむと、玄人仲間に配布されているパムフレットに広告してさがしてくれるのだが、こうして手に入れた本はめつたとない。小さな古本屋の中には、自分の店に本を置くかたわら、客の注文をきいて、古本屋仲間をたずね歩いてさがしてくれるのがある。こういうのに頼んだ方が割合早く見付かるようである。私はこうしてワーズワースの「湖水案内（ガイド）」（ウォーズワーズ）の古版を手に入れた。こんな事情から察して、ロンドンには古本屋仲間で催す定期の古本市といつた便利な取引機関はないのではないかと思う。古本の値段が本屋によつて割合に開きが大きいのもそんなところから来ているのかも知れない。もつとも、ロンドンにはクリスティとかサザビといつた世界的に有名な競売店があつて、そこの売立てで古書の相場がかたちづくられるわけであろうが、ここに出る書物は一冊十磅以上もする稀書珍書ばかりである。

一体にロンドンの古本屋は古風で、そしてのんびりしている。全然同じ版の本で、保存の良い方が安い値、悪い方が高い値で同じ書店の棚に収まつていることがある。どうして悪い方が高いのかと詰問すると、それは仕入値段がちがうからと答えてすましている。一寸大きな本屋になると、一階の本は客に自由に出入させて見せるが、珍らしい本は地下室か二階や三階にしまつて置いて、客の注文に応じて出して来て見せるといつた営業法をとるのが多い。大分顔馴染みになると、こういう部屋にひとりで勝手にはいつて棚を検べてまわることを許される。マークス書店など一度三階に通してもらつたことがあるが、スウィフト全集のいろんな版がずらつと並んでいた。ディケンズ全集なども、いつも七、八種位の版を揃えて持つている。地下室にはいつたとき、ブラウニングの「メン・アンド・ウィメン」の初版が私にも手の届く値で出ているのを見付けてうれしかつた。文学書ではここあたりがロンドンでも屈指の大きな店であろう。

どこの本屋も見切り本は一志か二志位の均一値で、店外の歩道につき出した棚に並べて置いてある。丹念にあちこちの棚を見てあるいているうちに、いい買物が見つかることが多い。どこも見張りの小僧など置いておらず、店内の主人も外に気をつけている模様もない。安本とはいえ、よくあれで盗難にかからぬものと感心する。英国では、他の品物を買うときもそうだが受取りをくれない。私はロンドンに来てはじめの半年の間は、買つた本は送料を払つて、その本屋から日本に送らせることにしていたが、滅多と領収証をくれない。勿論請求すれば書いてくれるが。これはオクスフォードの本屋で買つても同じであつた。私の経験では、こ

うして送らせた本が本国につかないことはまずない。ただ一度フォイルズから送らせた子供宛ての本二冊が到頭つかなかつたことがあつた。店に出向いて事情を話すと、顔見知りの店員がすぐにまた同じ本の再発送の手続きをとつてくれた。

酒　場

英国の商店は休みが多い。日曜日は勿論だが、土曜日も午後は閉じる。土曜日の午後を休まぬ店は木曜日の午後を休む。店によつては、一週間に土、日の二日、または木、日の二日を丸休みする店もある。平日でも、食堂や酒場を除いて午後五時か六時には殆んどすべての店が閉じてしまう。ロンドンに来た当座はこの習慣が仲々頭にはいらず、晩になつてマッチを切らして煙草屋へ買いに出かけるとしまつていたり、日曜の遠出にサンドウイッチの買置きを忘れて、行く先きの町でお昼になつて営業中の食堂を見付けるのに苦労をしたりした。その中でも酒類の販売には特に制限があつて、日中でも一定の時間でなければ売つてくれぬ。酒場も同様で、昼は十二時頃から午後二時、夜は午後五時半から十一時までであないと開いていない。十一時に五分まえになると、電燈をバッバと明滅させて予告をし、十一時きつかりにさつさとお客を追出してしまう。情容赦もあらばこそである。英国のピューリタニズムの名残りであろうか。英国から欧洲大陸に渡つて、ドイツで朝飯にラガー・ビールの満がひけたり、パリーで午前一時すぎまでカフェに頑張つてコニャックをちびちびやれたりすると、夜が明けたような気がする。

英国で簡単にお酒ののめるところといえばパブリック・バー、略してパブである。ロンドン市中は勿論、英国中いたるところにこの設備があり、店に大小の区別はあつても、内部の構造もサーヴィスも殆んど同じである。もつとも田舎では夕方は午後六時半から開くところが多い。それからロンドンでは大抵パブリック・バーの入口に隣り合つてラウンヂ・バー（サルーン・バーともいう）の入口がある。ところがはいつて見ると中は同じ部屋で、パブの客の部屋とラウンヂ・バーの客の部屋との間に一寸した仕切りがあるだけである。カウンターの内側は両方に共通で、サーヴィスをする人間も同じであれば、出す飲物も同じである。カウンター越しに向う側の客の顔が見える。ちがつているのは飲みものの値段がパブの方が心持安いだけである。それでも、それぞれのバーに出入する人間の種類はちやんときまつていて、相犯すことがないらしい。成程よく見れば、パブの方のお客は身なりが幾分悪く、無口でブスッとしている。ラウンヂ・バーのお客は身なりがととのつているし、ことに若い奇麗な婦人のお客さんは全部といつていい程ラウンヂ・バーの方に集つて来て、部屋の空気が明るい。外国人の眼から見ると、この仕切りの意味がどうも腑に落ちず、色々英国人に問いただして見るが、要領を得ない。しかし一見無意味に見えるこの一枚の仕切りは、現在の社会主義国家の英国でも、古い階級の障壁が依然ぬき難い力を持つていることをものがたるものではあるまいか。そしてそれは同時に、こういう根深い障壁も形だけを残して、現実には次第にその実を失いつつあることをものがたつているのだ。

バーでとる飲みものは、先ずビールである。ブラウン・エイル、ペイル・エイル、ライト・エイル、ビター等いろんな種類がある。

しかしどれを飲んで見ても、日本でアサヒ、キリン、ニッポンなどというビールになじんでいる口には一向にうまくない。ただスタウトはうまい。ギネス・スタウトというのが一番人気があり、地下鉄の壁などにも派手な広告をしているが、私はバークレイ・スタウトの方を好む。この外に、ラガー・ビーアがあつて、日本のビールに似てうまいが、これはデンマークかドイツ出来の輸入品である。これは夏冬ブッカキ氷の中に瓶をつつ込んで冷やしてあり、英国産のビールよりは幾分高い。バーで出すビールはきまつたように半パイント入りの小瓶であつて、コップに注いで丁度一杯になる。値段は酒場によつて幾分の違いはあるが、一志二片から一志四片というところ。ラガ・ビーアは一志五片か一志半位する。英国では瓶詰ビールの方が上等であつて、カウンターの片隅にとりつけた把手を押して、コップにジャッと出す式のは水つぽくてまずい。しかし何しろ安いのが取り柄で、酒場で見ていると、このドラーフト・ビーアの愛飲家は随分多いようである。

外に、ウィスキー、シェリ、ブランデー、ベルモット、ヂン、ラム、注文すれば何でも出すが、値段は恐ろしく高い。ウィスキーを注文すると、ワイングラスに大切そうにちよつぴり五分の一位を注いで出してくれる。それで二志。まわりの連中が殆んどビール党なので、注文するのに気がひける。ウィスキーは瓶で酒店で買おうとしても、ヂョニ・ウォーカーとかオウルド・バアなどという名の通つた品は仲々手に入らない。自国産のうまい銘酒は輸出に廻わしてドルをかせがせ、自分等は水つぽい樽抜きビールで我慢して不平もいわずにいる英国庶民は見上げた心がけだと思う。

酒場では、一般に立つたなりで、だまつてビールをあおつてひとりで酔心地を楽しんだり、連れの客と静かに話したりしてすごす人が多い。もつとも、カウンターの前には脚の高い腰掛けもあり、部屋の一隅には僅かながらテーブルと椅子も置いてあつて、利用するのは自由である。イタリーやフランスでは、カウンターで飲物を受取つて、そばのテーブルに席を取ろうとすると「そこで飲むなら値段がちがう」などと給仕に剣突を食うが、英国ではそんなことはない。

バーで気づいたことは、婦人客が珍らしくないことである。まず、夫婦連れではいつて来る。細君の方はシュウエップスなどというサイダー見たいなものをワイン・グラスに注がせて夫君のお相手をしているのもあるが、ビールの大コップを傾けて旦那さんと張合つている女傑も多い。それから、単独でぶらりはいつて来ておいしそうにビールを一杯味わい、タバコ一本ふかして、さつさと出て行く女客がある。オフィスからかえる途中のタイピストといつたところか。年齢層もひろく、単独の老婦人のお客も見かける。老人にきくと、昔はバーには女は出入しなかつたという。女子で独立の生計を営むものがざらにあり、夫婦でも共かせぎが珍らしくなくなつた現在、あらゆる方面で女子が男子と対等の立場に立つようになつたことがこういう現象を生んだのであろう。

「此頃地下鉄やバスの中で、男子は何故女子に席をゆずらなくなつたの。」「それは英国中の紳士という紳士は、先きの大戦でみんな戦死しちまつたからさ。」こんな笑話を英国に行つてからきかされた。しかしこれも、戦後の公衆道徳の低下というよりも「女子は男子よりも弱いもの、いたわつてやらねばならぬもの」とい

う考えが、今日では時代遅れのものとして棄てられつつあるためと見た方が正しいように思われる。

ロンドンには文学にゆかりのある、古い酒場が少くない。シティーのロムバード・ストリートを北にはいつたヂョーヂ・ヤードと、バーチン・レインから東にはいつたカースル・コートという二つの小路の交叉点には、ディケンズのピクウィク氏とサムが宿をとつていた「ヂョーヂ・アンド・ヴァルチャ居酒屋兼ホテル」がある。「ピクウィク・ペイパーズ」の中ではそのあたりを評して「大変結構な、古風で、住みごこちのよい場所」といつているが、一世紀あまりを経た今日ではあたりにぎつしりビルディングが立並んで、ヂョーヂ・ヤードもせまくるしい小路でしかなく、名代のタヴァンも日蔭の、目につかぬ存在になつてしまつた。しかしこの小路からわずかにのぞいて見える四階の壁には「オウルド・ピクウィキアン・ホステルリー」とインキも黒々と大書して、その由緒を誇示している。

同じくシティーの新聞社街フリート・ストリートを北にはいつたワイン・オフィス・コートというせまい露路には「イー・オウルド・チェシア・チーズ」がある。一六六七年、ロンドン大火の翌年に再建して以来、今日まで二百八十八年間、十五代の治世を引続いて営業している古い店で、ヂョンスン博士とオリヴァ・ゴウルドスミスもよくここで食事をし、そのあとパンチをのみながら文学談に耽つたという。近代になるとサッカレー、ディケンズ等もこの店の常客であつた。店名を記した直径二尺程の円板形の看板はチェシア・チーズでもかたどつたものか。ちなみに、この露路を北につき当つて左にまがつたゴフ・スクェアにはヂョンスン博士が辞典を執筆していた頃に住まつていたヂョンスンズ・ハウスがある。今は記念館になつていてヂョンスン関係の遺品を収めてある。

ロンドン橋を南に渡つたバラ・ハイ・ストリート沿いの東側の小路にはヂョーヂ・インがある。もとはそのまえの空地をかこむようにして建つていたというが、今はその南側の建物だけが残つている。木造三階立ての、恐ろしく古ぼけてかたむきかけた建物で、隣のビルからこちらの二階のバルコニーにつつかい棒がさし渡してある。三階も二階と同様、正面がバルコニーのようになつて手摺がついている。これが今日ロンドン市中に残る只一つのギャラリード・インで、十七世紀終り頃のものという。昔の旅籠屋はみなこの形式だつたのだそうな。いまはナショナル・トラストの所有になつているが、営業はつづけている。中野好夫氏がロンドンに来られたときの、英文科関係の連中の歓迎会は、成田教授の肝入りでここでやつた。近くには、チョーサーのカンタベリ参りの巡礼の出発点だつたタバード・インの跡がある。

ロンドンの北部には広大なハムプステド・ヒースがひろがつているが、その西部を南北にはしる快適なドライヴ・ウェイのスパニアーヅ・ロウド沿いには、ヂャック・ストローズ・カースルとスパニアーヅ・インといういずれも白堊の瀟洒なインが建つている。どちらもディケンズにゆかりの場所で、ことに前者はハムプステッド・ヒースの散策を愛好していたディケンズが、後に彼の伝記を書いたヂョン・フォースタとよく食事を共にしたところという。

ロンドンを立つ少し前のことであつたが、ある晩教育大の桜庭

氏につれられて、イースト・エンドのバーに行つたことがある。メトロポリタン・ラインのウォピング地下鉄駅で下車して、両側に倉庫が立並んで人通りの殆んどない、淋しいというよりはむしろ気味悪い通りを何町か行つたところの、テムズ河畔に立つているプロスペクト・オヴ・ホィトビーという酒場であつた。午後八時頃であつたが、カウンターのまえには二、三人のお客がいるばかりで、部屋の一隅には小ざつぱりしたなりの若い芸人が四人程、手持不沙汰のていでバンヂョウをボロンボロンかき鳴らしていた。窓の外には闇い夜空の下を、テムズが漫々と水をたたえて流れている。対岸はサリー・ドックスである。ビールをとつて、隅の席に腰を下し雑談をしているうちに、いつのまにか人が殖えて来て、九時半頃には部屋が一杯になり、やがて楽師等のかなでる楽の音にあわせて客の二、三がうたい出した。それに和するものが次々に出て来る。夜が更け、酒がまわるにつれて、それは部屋全体をこぞる一大合唱へと発展して行つた。気分がとけ合うにつれ、あちこちで見知らぬ同志の交歓がはじまる。日本にいたことがあるというので我々に握手を求めて来る紳士がある。まことになごやかな一夕であつた。道が遠いので、十時半頃にきりあげて、例の河畔の倉庫街をてくつて帰つたが、出がけに気がつくと、酒場のまえには自動車がわんさ行列して駐車していた。紳士達が自家用車を駆つて、わざわざこんなイースト・エンドのはずれまで出掛けて来るところを見ると、こういう雰囲気の酒場はロンドンでも珍らしいのであろう。この酒場の二階にはピープスの部屋というのがあるそうである。ピープスとは恐らく例の十七世紀の日記作者のことであろうが、その由来はついにきかずにしまつた。

「カースタブリッヂ」見物記

一九五四年十月十七日　先日果さなかつたドーチェスター行きを思い立ち、宿の近くのバディントン停車場から、午前九時廿五分発のサンディ・エクスカーション・トレインに乗る。ウェストベリにつく直前、南方のブラットン丘の中腹に大きく白馬が刻まれているのを望見する。バークシアのホワイト・ホース・ヒルの白馬が子供の線画のようなのとは異り、これは左向きに立つた恰好の、ちやんとした馬の形をそなえている。アルフレッド大王がデイン人相手の会戦の勝利を記念して刻らせたものという。先日はこの駅で列車が両断されたのを知らず、見当違いの方向につれて行かれ、チェダー峡谷と鐘乳洞の見物でお茶をにごした。今度は無事午後一時に目的地に到着する。停車場から歩いて数分でコリトン・ウォークスという、片側に美しい並木の植わつた道と大通りとの交叉点に達する。交叉点近く並木のつきる芝生の上にトマス・ハーディの坐像がある。一九三一年九月二日、彼の友人で劇作家のサー・ヂェイムズ・バリーによつて除幕された。ハーディーはこの町の東約二哩のところにあるボクハムプトンという村に生れた。ドーチェスターはハーディー・カントリのカースタブリッヂであつて、小説「カースタブリッヂの市長」は主な舞台をここに取つているのである。人口約一万。なだらかな坂道に立てられた市場町で、その発祥は羅馬軍侵入以前に溯るという。ハーディー像のある辺が町では一番の高みで、それからまずハイ・ストリートを東に下りて行く。街路の中央はアスファルト、歩道は石でたたまれ、街路には塵一つ見えぬ。街路の両側にはところど

ころ落着いた赤褐色の煉瓦造りの家がある外、灰色の砂岩を積上げた建物と、奇麗に白漆喰で塗上げた家が立並び、街全体が明るい清潔な感じである。日曜のこととて、店はみなしまり通りには人影がまれだ。坂の中程の左手にセント・ピーターズという町の教会がある。そのまえに、この地方の牧師詩人ウイリアム・バーンズの銅像が立っている。額のひろい老人があごひけをはやし、外套様のものを着て、半ズボンをはいた左脚を一寸まえに出して立っている姿で、朴訥な田舎詩人の風貌がよく出ている。そこを少し下った同じく左側の建物がタウン・ホールである。茶褐色の煉瓦造りの縁辺に厚く白い石をはめこんだ色のとり合わせが面白く、ことに、二階の一角からニューと突出た八角の時計塔が印象的である。ここを更に半町下った、やはり左側に「カースタブリッヂの第一のホテル」キングズ・アームズがある。これはハーディーの時代にそうであったばかりでなく、今もそうらしい。ヘンチャード夫人がその娘エリザベス・ヂェインをつれ、別れた夫をたずねてこの町にやって来て、その夫がいまはこの町の市長として、公けの宴席に列しているのを見たのはここであった。白塗りの三階建ての奇麗なホテルで、小説に「正面玄関の上に広い張出し窓が突き出ていた。」とあるのは今も変らない。ここを更に少し下るとスリー・マリナーズという酒場がある。この辺によく見かける灰色の石の積かさねで出来た、二階立てのささやかな建物である。恐らく、先きの母娘やファーフレイが宿泊していた同名の旅籠屋はここに建っていたのであろう。もとの建物も砂岩造りであったが、それはすでにハーディーの執筆当時にとりこわされていたことは、小説の中で語る通りである。

ここで通りを引返して坂を上り、左に折れて、町の中央を南へとウェイマス・ロウドに通ずる街路に出る。町の南はずれに近いところまで来ると、道路の左にモームベリ・リングズがひろがっている。ここで一寸ハーディーの記述を借りよう。

「カースタブリッヂのリングはブリテンに残る円形劇場中最も立派なものとは云わぬまでも、最も立派なうちの一つにつけた地方名であった。そのカースタブリッヂに於けるは、あたかもコリシアムの廃墟の現代ローマに於けるが如きであった。また事実それと殆んど同じ大きさであった。夕闇こそはこの暗示深い場所の本当の印象を得るに適当した時刻であった。その時刻にそこの闘技場に立っていると、昼間その頂からちらちよいと見ただけでは仲々わからぬ真実の広大さが次第にわかって来た。陰気で、荘厳で、物淋しくて、しかも町のどの区域からも来られるので、この輪形の史蹟は人目を避ける会合の地としてよく選定されるのであった。」

この記述から、私はローマのコロシアムに似た廃墟を見るつもりで来たのであったが、実際に眼にするものは、一面に美しい緑の芝草に蔽われた広場であって、周囲をとりまく、低い、勾配のゆるい、輪形の土手によって、僅かに古ローマ時代の円形劇場趾と推測される程度のものである。もとの建物の名残りと思われる大理石のかけらなど全然眼に入らない。あるいは、はじめから土の構築物だったのであろうか。ローマのコロシアムの直径は縦六一五フィート、横五一〇フィート、高さ一五七フィートだ。それに対してこのリングの直径は縦二一八フィート、横一六三フィート、土手の高さは精々のところ一五フィートなので、ハーディー

の記述の「殆んどコリシアムと同じ大きさ」とあるのは、現実のリングには当てはまらない。しかし英国に残るローマ風円形劇場跡としては、これが最大、かつ最完全に近いものといわれる。ハーディーがここを舞台にとつた時分と比べて、あたりに大分家も立つたらしいが、今もつて町はづれの落ついた静かな場所で、市長ヘンチャードが廿年ぶりに、別れた妻とひそかに会合する地点として思いつくにふさわしい環境である。土手の上に腰を下し、しばらく小説のあれこれの情景など思いおこして感慨にふけつたあと、再び元の道路に引返し、町はずれから、両側に並木が生いしげつてトンネルのようになつて南に走つているウェイマス・ロウドに出る。その右手の、二哩程向うにつらなつて見える山のいただきにあるのがメイドン・カースル――ハーディーの小説のマイダーン――である。英国にのこるローマ軍の城砦あととしては最も完備したものの一つというので、是非一見したかつたが、相当の道のりであり、すでに夕暮に近いので断念して町の中心へ引かえす。ヘンチャードの愛人ルーセッタがカースタブリッヂに移つてから住まつていたハイ・プレイス・ホールは、実名をコリトン・ハウスといい、ハイ・ストリートから北に折れたグライドパースという小路にあつた。セント・ピーターズ・チャーチに程近いところである。しかし今ではこの建物はとりこわされ、その玄関のアーチの要石になつていた、薄ら笑いを浮べた人面はとりはずされて町の博物館に収蔵され、ハーディ記念品の一つになつている。たまたま建物跡の附近に来合わせて、私をそこまで案内してくれた町の老紳士は、自分も子供の時分、それに石をぶつつけて遊んだものだと話してくれた。再びハイ・ストリートを東に下り、町はずれに近いところまで来ると、通りを横断する小川に小さな橋がかかつている。それがスウォン・ブリッヂである。町をはずれてロンドン街道に沿い、約一町程行つたところにかかつているのがグレイズ・ブリッヂである。二つとも、町の落魄の徒がたそがれ時にただずむ場所として、小説の中に描かれている。前者は「雨風のため変色した煉瓦造り」とあるが、現在はかけ直されて、小ざつぱりした、白色の石橋になつている。後者は「石造で、大道沿いに更に向うにあつて、まだ町の区域内にあるとはいえ、実は牧場の中にあつた。」とあるのは、現在も大体変りはない。近くに幾軒か、民家が立並ぶようにはなつたが。その橋の上に立つて北を見渡すと、その辺一帯は、ところどころに林のちらばる美しい牧場をなし、その間をフルーム川が、沼のようなゆるい流れをなして、うねり流れている。流れがせばまつたところに簡単な仕掛けの水門が見える。それが「テン・ハッチェズ」である。落ぶれたヘンチャードが自殺を考えながら夕暮にただずみ、町の悪戯者共が投げ込んだ彼自身の人形が流れてくるのを見たところである。この辺の光景は、小説に描かれたところを読んだ感じと殆んど変らない。ここについたときは、午後四時半頃で、川の面にうかんでいる二羽の白鳥が、薄闇のなかにぼーつと白く浮き上つて見えた。

ハーディーの生家へは、時間がなくて到頭行けず、また「カースタブリッヂの市長」の原稿など、ハーディーの遺品を収めた博物館も、日曜で閉鎖されていて、見られなかつた。十数枚のカラー・フィルムを撮つたのをなぐさめにして引上げる。午後六時五十五分の指定列車に乗り、バディントン停車場に帰着したのは午後十時半であつた。